

大阪

あんなとこ
こんなとこ

『都島』

今回は、都島と同区に残る史跡についてお伝えします。調べてみたところ、「都島」という地名がとても古くからあった事に驚きました。平安時代の逸話が伝承され、住宅地の中にとけ込むように現在も残っています。

地名の由来

奈良時代、現在の都島区一帯は淀川と旧大和川河口の三角州で、葦が一面に生い茂り、人家はなかったようです。平安時代頃から荘園ができ、人が集まり居住し始めたと言われています。「都島」の地名は、心神天皇の大隅宮や孝徳天皇の長柄豊碓宮が淀川の対面にあった事からという説、もしくは、これらの都に向き合う島という意味の「都向島」から転化したという説があります。

大阪の地に宮廷が無かった時代の行宮や副都として、平安時代以降も天皇の行幸があったという資料が残されています。皇室との関係が深い地があったことから、付近の島々を総称して都島と呼んでいたという説もありました。島々が陸続きとなり、各地に村落が生まれた後も、呼称はそのまま残ったと考えられています。

都島にある史跡

善源寺町1丁目にある善源寺楠公園には、「渡辺綱・駒つなぎの樟」という樹齢が900年近い大楠があります。平安時代の人物で、茨木童子という鬼の腕を切り落としたという伝説がある渡辺綱は、源頼光の荘園である善源寺荘の管理を委託されていました。その渡辺綱が、ここに来るたびに馬をつないだ樟という伝承が残っています。また、都島本通2丁目の住宅街の一角には、「平家物語」にも書かれていた鶴めえを埋めた塚があります。平安末期に近衛天皇を夜ごと悩ませていた怪鳥を源頼光の子孫である源頼政が射落とした所、頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿で鳴く声は虎とら・鶴かづに似ていたといえます。その遺骸が淀川をつたって流れ着いた場所といわれている所に鶴塚があります。大阪港の紋章は、この鶴をデザインとして使っています。さらに平安時代後期の後白河法皇ゆかりの史跡が「母恩寺」です。14世紀に建てられた都島神社の石塔は大阪市の有形文化財に指定されています。



大阪港の紋章

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞